

シンポジウムを6月22日(土)開催しました。参加者の声をまとめました。

会場 愛知文教大学 国際交流会館2階

後援 小牧市教育委員会

テーマ 「地域と組織と教育実践から考える学び合う学び -小牧市の試みを通して-

コメンテーター 学び合う学び研究所シニアフェロー 的場 正美

登壇者 学び合う学び研究所シニアフェロー 副島 孝

登壇者 宮城教育大学 金田 裕子

登壇者 小牧市立桃陵中学校 丹羽 浩一

公開シンポジウム、大変勉強になりました。「学びあう学び」を、三者三様のとらえ方で語ることで様々な切り口が見られて興味深く感じました。

「学びあう学び」の一番の良い所は「子どもの姿」を見ることが、授業研究の視点になったことです。だれのための授業なのか、やはり、子どものための授業を目指したいとあらためて思いました。

副島先生、丹羽先生、金田先生のご発言をお聞きして、今自分たちが何げなくやっている「学び合う学び」の背景や意義について来ることができました。よく学校現場にいと「子どもありき」を軸に置きつつ、実践から学ぶことが多いですが、その実践のバックグラウンド(理論的なこと)も整理・分析してみることで、実践に磨きがかかると感じました。

また、金田先生のお話の中の「キラキラした目で子どもたちを捉える」という言葉がとても印象に残りました。やはりどうしても「評価しなきゃ」「ここまでできるようにしなきゃ」などと義務感のもとで子どもたちを指導してしまうときがあるが、時には「キラキラした目でまでもちを見る」ていることだけに集中して授業実践を行いたいと思った。

ありがとうございました。

長いこと、この「学び合う学び」に何となく身を置いてしまって、自分が学ぶことを真剣にしてこなかったことを悔やみます。でも最初から当たり前のように周囲の先生方が常に学んでおられ学び合う学びを進めている学校に出会えたことは幸せだと思いました。

どんな授業からも学ぶ、という姿勢は忘れず、また生徒の様子から学ぶ、という姿勢も忘れず、教師として「在」していきたいと思います。

教育は、音楽と同じで、どんなに追究してもゴールがなくみんなで考えていけるものだからこそ続いていくのだと感じました。

公開シンポジウムでの学び合う学びに関する発表や議論を通して、子ども同士の学び合う学び、教師同士の学び合う学び、子どもと教師の間での学び合う学び等、様々な学び合う学びに触れることが出来、私は今、誰を学び合う学びをして、学んでいるだろうか?と考えることにつながりました。

保育を学ぶ学生として、教育(小学校以降の)に触れ、その領域の人々の考えを聴くことも学び合う学びの1つであるように感じました。学校も、「教師と子ども」に留まらず、外部の専門家や保護者と学び合う学びを行うことが必要であるように思います。

本日の学会を開催してくださった大学関係者の方々、その他の多くの関係者の皆様発業者の方に感謝いたします。ありがとうございました。